■論文

「健常者／障害者」カテゴリーを揺るがすスポーツ実践

ー車椅子バスケットボール選手の語りからー

渡 正¹⁾

抄 録

障害者スポーツをめぐるのは現在のスポーツが抱える問題点がもっとも顕在化する場として、また近代スポーツのオルタナティブについて思考する場として議論が蓄積されてきた。そのため今まさにスポーツを実践している「障害者」の姿や経験が議論から遠景化してしまっていたことは否定できない。

本稿はこうした問題意識から、車椅子バスケットボールチーム、選手への調査をもとに、「障害者スポーツ」、「障害者」カテゴリーが実践当事者にとってどのように把握されているのか、また、スポーツを実践する彼らにとって、自己の「障害」や他の「障害者」がどのように把握されているのかを明らかにする。

彼らは、身体条件の平等性という前提が崩れていることを知りながら、あえて競技スポーツの中でスポーツを実践していた。また支配的社会から押し付けられた「健常者／障害者」カテゴリーのなかで、選択的に「にせものの障害者」という位置を占めてもいる。さらに、車椅子バスケットボールを健常者社会の押し付ける「障害者スポーツ」ではなく「スポーツ」としてカテゴリーをずらし、「健常者／障害者」という恣意的なカテゴリーを行き来する姿が、車椅子バスケットボール選手へのインタビューから明らかになった。これは彼らのスポーツの実践のなかから、スポーツとともに生み出された「スポーツにおける障害者観」ということができる。

だがこのとき彼らの実践が、自ら選択的にカテゴリーを「ずらし」、カテゴリーの自明性を崩している一方で、「重度者」を「障害者カテゴリー」として実体的に措定するという、極めて両義的な性格を有していることも明らかにした。

スポーツ社会学領域における障害者スポーツ論は「障害者」と名指されて生きざるを得ない彼らの生にとって、さまざまな生活の一断片に過ぎないスポーツ場面における経験が何をもたらしているのかを詳細にみていくことが求められていることを指摘する。

キーワード：障害者スポーツ、当事者の語り、カテゴリー

1) 筑波大学大学院博士課程
人間総合科学研究科

The Sport Practice Shifts a "Disability Category"

From Narratives of Wheelchair Basketball Players

WATARI, Tadashi ¹⁾

Abstract

Some scholars have been argued about the disability sport as an alternative of modern sport. One of their remarkable achievements is that they bring the disability sport as a controversial issue for the field of sport sociology. However they have not argued about experience of sport practice of a "person with disability". In order to understand a disability sport, it would be necessary to consider specific sport experiences.

The purpose of this article is to illustrate how wheelchair basketball players recognize the "disability sport" and the "category of people with disability", and also to illustrate how they recognize a "self-impairment" and other "people with disability".

As a result, their sport practice creates an "outlook of disability in sport". In addition, they call themselves a "fake-disabled". To the contrary, they call other people with disability a "true-disabled". This outlook is not static "able-disable" category. In some way, it is new category created from their practice, and it could be called a categorization practice. While their sport practice dislocates a "category of disability", this practice also puts label on other people who are more "severely disabled" as a substantive category. Thus, their practice has an extremely ambiguity character. Finally, I suggest that disability sport studies in sport sociology should pay more attention to athletes' specific experiences. The experiences of sport practice influence on identity of players who cannot but live as a "person with disability".

Key words: Disability Sport, Narratives, Categorization practice

---

1) Doctoral Program in Health and Sport Science University of Tsukuba

1 はじめに

障害者スポーツを論じようとするとき、障害者のスポーツ振興政策や、スポーツ施設に関するバリアフリーについての検討や、障害者スポーツを検討することで可視化されるスポーツ一般の問題を論じることがこれまでの中心課題であったといえる。だがこれらの視点は、本当に「障害者スポーツ」を論じてきたといえるだろうか。

佐藤は、『障害からスポーツを考える、また、スポーツから障害を考えるという姿勢』は、スポーツ社会学における障害者スポーツ研究の重要な視点〔佐藤, 1999: 68〕と述べるが、これまで前者の問題ばかりが注目されてきたといえる。たとえば、海老原は「パラリンピックにこめられるメタ的メッセージを検討すると、南北問題を隠蔽し、新たな階層化を自明視させないという点で、オリンピックと同様に、いやむしろより鮮明にあらわれてくる」〔海老原, 2001: 69〕と論じる。藤田は、障害者スポーツの検討を通して近代スポーツのオルタナティブを提示できるとする〔藤田, 1999, 2004〕。これらの視点は障害者のスポーツを通してスポーツを論じてきたものであり、スポーツのなかで可視化される障害者と名指される人々や、健常者と障害者という枠組みについて論じられてきたとはいえないのである。

言い換えるならば、障害や障害者の概念があらかじめ固定化され、そのなかで恣意的な規範が、「障害者のため」という観点から押し付けられてきたともいえる。たとえば芝田が障害者には「たった一度の人生を『精一杯健康で豊かに』暮らすために」〔芝田, 2003: 30〕スポーツが必要だと述べるとき、対象とされる「障害者」とは一体誰のことなのか。「健康」や「豊か」であることが主観的な価値判断である可能性がある以上、人生を「精一杯健康で豊かに」暮らさなければならないと他者から指示される人々とはどんな存在なのか。芝田にとって障害者という概念は自明なものであり、彼にとっての障害者概念のなかで、彼／彼女らがどう生きるべきかが提

案されているといえる。

そこで本稿では、まず「健常者／障害者」という枠組みについての認識を示す。「障害者スポーツ」を論じるためには、そこでのスポーツを論じる以前に、「障害者」という用語に関して筆者の認識を明らかにしておく必要がある。

本稿では、いわゆる「健常者／障害者」という二項対立的な図式は採用しない。また、「障害者」という実体も想定しない。倉本が述べるように、「障害者とは、身体上の差異に関わって他のひとびとから分かれた『障害者』と名づけられるとともに、『障害者』としてふるまうことを期待されるひとびとのことである……『障害者』『健常者』というカテゴリー自体、特定の時代、特定の社会が生み出したものであり、誰がどのようにしてそれらのカテゴリーで語られるかもその時代、その社会によってちがってくる……それを決める仕組みもいろいろで歴史や文化を越え障害を客観的に定義する基準などどこにもない」〔倉本, 2000: 97-99〕からである。本稿では、以上のように障害者という用語を捉えることにする¹⁾。

本稿が上記の立場に立つ以上、「健常者／障害者」カテゴリーが、そう名指される人々にとってどのように捉えられているかに注目することになる。「障害者スポーツ」あるいは「障害者」というカテゴリーがその実践当事者の行為を伴いながらどのように形成され、捉えられ、使用されているかを明らかにする。現在スポーツを実践している障害者にとってスポーツはどのように経験されているのか、彼らのスポーツ実践のなかに「健常者／障害者」という枠組みはどのように位置づけるかを捉える作業である。そのために、車椅子バスケットボールチームでの調査から得られた「障害者」の語りをもとにして、健常者／障害者、障害者スポーツをめぐる言説を分析する。そして、「健常者／障害者」のカテゴリーがスポーツの実践を通して状況に応じて使用されるものであることを明らかにする。だが、これはあくまでも、障害者スポーツに参加している人々がどのような身振りによって健常者の押し付けた「カテゴリー」や「常識」を揺り動かし

ているのかについての解釈の可能性を示すものである。

2 先行研究の検討

障害者スポーツに関連した先行研究は、1) スポーツ・運動の意義や有用性を主張する議論、2) 量的調査から施設や環境の問題を指摘するもの、3) 障害者スポーツに近代スポーツを相対化する契機をみるもの、という大きく3点から議論が行われてきたと筆者は捉えている。そして、これまでの障害者スポーツに関わる議論は特に1)と2)の観点が主流であり²⁾、近年になって3)のような障害者スポーツの社会学的研究が始まったといえるだろう。

ここでは、障害者スポーツのスポーツ社会学的研究に注目して本稿の先行研究を概観していく。まず、障害者スポーツの社会学的研究が前提とする障害者スポーツに関する状況とその問題点に触れる。ついで、これまでの研究が前提とされた問題点を乗り越えるためにどのような議論を展開してきたのかを見ていくとともに、それらの議論が抱える問題点を指摘する。その上で、筆者と類似した観点から障害者スポーツを論じている後藤と阿部の議論を紹介し、本稿の位置づけを明らかにしていく。

藤田は1996年のアトランタ・パラリンピック前後から現在までの流れを「スポーツへの目覚めの時代」とし、「障害者スポーツはスポーツとして認知され、スポーツのメインストリームに合流しつつある」[藤田, 2004: 28]と述べる。リハビリテーション・レクリエーションの手段という範疇を超え、パラリンピックに代表される、近代スポーツ化、高度化の方向にあるのが障害者スポーツの現状である。この傾向に拍車がかかるなか、現状の障害者スポーツは、大きく4つの問題点が指摘されている。

第1の問題は、障害者スポーツの近代スポーツ化に伴う、行き過ぎた勝利主義と商業主義である[藤田, 2004: 282]。その象徴的な出来事が2000年のシドニー・パラリンピックで起こった。パワーリフティングで10名の選手がドーピング

によって追放処分を受け、知的障害クラスのバスケットボールに障害のない選手が多数出場するなどがあった。

多くの障害者スポーツでは、障害の内容・程度が同じとされる人たちがひとつのクラスとなり競技が行われる。だが、身体条件を完全に平等にしようとするクラス数は参加選手数に限りなく近づき、競技が成り立たなくなるため、競技が実施可能な程度まで身体条件の違いを捨象し、ひとつの競技に参加する選手数を確保する必要に迫られている。結果、同一の種目に参加するアスリートの間には無視できないほどの身体条件の差異が生まれてしまう可能性が出てきており、競技における平等性の確保に困難が生じたことが第2の問題である。第3は、競技の高度化とパフォーマンス向上の推進の結果、障害の程度が重いほど競技を進めるなかでの不利が増大してしまう点である。競技の高度化を志向するほど、結果的に「重度障害者」をスポーツ参加の場から遠ざけてしまうことになる。最後に、近代スポーツ化が結局、「健常者」と「障害者」との差異化を助長してきたといえることである。たとえばパラリンピック男子100m(切断など、T44)で11秒09の世界記録を樹立したマーロン・シャリーは「義足にしては速いという言説」[海老原, 2001: 70]によって固定化される。彼/彼女たちはどれほどの記録を出しても、「あくまでも障害者」というポジションにおかれてしまうのである[藤田, 1999, 2004, 高橋, 1999, 阿部ら, 2001, 八十川, 2001]。

以上が障害者スポーツの社会学的研究がある程度共通の前提としている問題であるといえる。これらの問題を乗り越える方法として、藤田は「スポーツのルールや身体活動の方法を個人の身体的状況、あるいは知的な発達状況に応じて変容させる」[藤田, 1999: 286]、adapted physical activityという概念を提示する。高橋は「業績主義と能力主義を絶対視するスポーツを追及するのではなく、『できる』ことに価値を置くことを前提としない身体運動文化……身体を媒介とすることによるコミュニケーション、そして『あなた』と『私』が溶け合ってしまうような身体的

共振によって生じる祝祭性に特徴づけられる身体運動文化」[高橋, 1999: 46]を、八十川は「規律化された従順な身体から脱出し、自己への気づきの延長上に差異を前提とした他者理解の可能性」[八十川, 2001: 36]を提案している。だが、これらは近代スポーツ化と競技の高度化についてよりも、新たな「身体運動」の価値体系を築く可能性に重点を置いた提案だといえよう。

では、これまでの議論が内包する問題点とは何か。第1に従来の障害者スポーツ論は、まず健常者と障害者のスポーツにおける共生や統合、スポーツの新たな価値が議論される。理念的問題が中心となっているため、いままさに「現実」にスポーツを実践している障害者の経験や、近代スポーツ的価値観のなかでスポーツを享受している人々は議論の遠景に退けられ、射程に収めることができていない。第2に、彼／彼女らが議論の対象としている「障害者」とは一体どんな人々なのか。先に障害者の認識について本稿の立場を示したが、障害者スポーツ論では実体として、あるいは本質的に「健常者」とは違った何かをもつ「障害者」として想定される。八十川はこれまでの障害者スポーツ論を「障害者と健常者の身体的エートスの相違」[八十川, 2001: 37]を無視しているとするが、その身体的エートスの相違の基点を「障害 (impairment)³⁾」に置く。ここでは、健常者と障害者は「障害 (impairment)」によって隔てられ、その有無によって人は二つの項のどちらかに配分される。「障害 (impairment)」があるかないか、という身体的差異が健常者と障害者の相違であり、その意味で健常者／障害者の間には実体化された区分が設定されている。

第1の点から、健常者と障害者が統合され、共生していく身体活動のために、障害者スポーツの競技スポーツ化が歓迎されることは少ない。競技スポーツは自立して何かが「できる」ことや、個人の「能力」が人間の価値そのものに直結する回路を内包していると考えられているからだ。つまり、スポーツの競争による順位づけが、単なるある特定の技術ではなく、参加している人間の価値そのものを序列化すると考えられて

いるのである。そのためパラリンピックを頂点とする競技スポーツ化した障害者スポーツで現に活動している障害者が、スポーツにおいてどんな社会的意味や経験を獲得しているかについては省みられることなく、現行のスポーツの制度や規範にかわる新たな身体活動の体系を築く必要があるとされてしまう。

第2の点から、これまでの障害者スポーツ論での障害者は、固定された「障害者」として措置されているといえる。彼／彼女らは、研究者の議論のなかではつねに障害者であり、これからも障害者でありつづけることになってしまう。つまり、障害者スポーツの進展が「障害者というカテゴリーを構築し障害者を排除してきた『近代』のイデオロギーを強化するものとなっていないだろうか」[高橋, 1999: 46]という高橋の卓見がありながら、障害者スポーツに関する言説それ自体が健常者／障害者の実体的な差異の言説の再生産となり、二項対立的な枠組みを強化してしまうという矛盾が生まれてしまう。

これらの点から距離を取るには、いままさにスポーツをしている障害者自身に目を向けることである。スポーツに参加している人々が、スポーツ自体に、障害に、健常者／障害者カテゴリーに、どのようなまなざしを向けているのかを考えることではないか。この姿勢を打ち出しているのが、後藤と阿部らの議論である。

後藤はこれまでの障害者スポーツ研究が「カテゴリー化された障害者スポーツを前提として語られている」[後藤, 2002: 176]とし、具体的なスポーツ場面に焦点を当てて、「スポーツ／障害者スポーツ」や「健常者／障害者」というカテゴリー化がどのようにして立ち現れてくるかを議論した。彼が明らかにしたのは、身体的な差異に関わりなくスポーツをする過程において、いったんは健常者／障害者というカテゴリーが意識されなくなるものの、スポーツの専門化・高度化の進行、あるいはそれぞれの技術が向上していくと、スポーツの場には「再び身体的差異があらかになり、障害者スポーツというカテゴリーが現れてくる」[後藤, 2002: 191]ということである。だが、彼の議論は結局カテゴリーがスポ

ーツのなかで形成された、というところで終わってしまい、その形成されたカテゴリーがスポーツに参加している障害者にどのように利用されているのかまでは論じていない。また、形成されたカテゴリーや、その要因とされた身体的差異を前にどのような身振りで立ち止まったり、乗り越えたりしているのかについては述べていないのである⁴⁾。

一方、阿部らはこれまですくい取られてこなかった障害者の選択的な生き方を記述し、同時に障害が相互行為においてもつ多様な意味を考察した。そして、新たなモデルとして「資源としての障害パースペクティブ」を提示する。阿部らは「いわゆる『障害者』もまた、つねにかかわらず『障害者』であり続けているわけではない……場面ごとに『障害者』であったり、なかったりする様子もまた、人々が生きている現代的『生』だとするなら、それをとらえる研究視角もあっていい」[阿部ら, 2001: 18] という。阿部らは障害者水泳に参加している二名へのインタビューから、障害者が自身の障害や水泳での経験などを、「障害を自らの属性としてではなく、他者が反応する刺激として活用」[阿部ら, 2001: 47] する道具として状況に応じて使い分ける様子を明らかにした。しかし、阿部らの議論は、対象者が障害やスポーツを生活のなかでどのような資源として用い、自らの生を戦略的に生きているか、という点に焦点が当てられており、対象者自身が「障害」や「水泳」そのものについてどのように捉えていたかについては深く掘り下げられていないという問題がある。

本稿は後藤と阿部らの、対象者の経験に即してカテゴリーや障害を論じる姿勢に学びながら、車椅子バスケットボールに参加する「障害者」が身体的差異の顕在化するスポーツ場面を中心に、どのような身振りで自らを位置づけようとしているのか、その一端を明らかにする。

3 選手の語りから

3-1 対象の概要

対象とした車椅子バスケットボールチームは、

東京都内で活動中の「東京スピリッツ」である。東京スピリッツは1967(昭和42)年に誕生した。近年まではレクリエーションが中心だったが、「スポーツやるなら勝たないと楽しくない」と語る現キャプテンのAさんがメンバーとなってからは競技性を追及し始め、現在は全日本選手権への出場を目指す競技志向のチームである。練習は週平均3回で、一回の練習時間は約2~3時間、メンバーは全員で15人を超えるが、各自仕事などの都合で練習に集まるメンバーは平均して10人ほどであり、これに他のチームの選手や健常者が加わっている。

本稿では特にメンバーのなかでもチームの中心的役割を担っている3名から得られた語りをもとに論を進める⁵⁾。3名の概要は以下の通りである。Aさんは、チームのキャプテンであり現在28歳、職業は公務員。車椅子バスケット暦は11年であり、東京都の選抜選手にも選ばれている。持ち点⁶⁾は1.5点。Tさんは、3年ほど前に他のチームから移籍した。年齢は31歳、職業は公務員。車椅子バスケット暦は11年であり、さいたま市の選抜選手である。持ち点は2.5点。Oさんは36歳、現在は無職。車椅子バスケット暦は6年で、持ち点は1.0点。Aさんは転落事故で、TさんとOさんはバイク事故で脊髄損傷し車椅子を使用する生活となる。

本稿の対象者は脊髄損傷によって車椅子を使用している肢体不自由者であり、いずれも知的な障害を伴わない中途障害者という点に注意が必要である。つまり、本稿での議論における論理展開はこの対象者に大幅に規定されていることは否定できない。

3-2 スポーツの「平等性」という幻想

障害者スポーツの問題点を前にして、多くの障害者スポーツ論が新たな価値体系の模索へと進むなか、その実践当事者に目を向けると異なった認識をもつことができる。藤田は現在の障害者スポーツの抱える問題を「競技化された障害者スポーツ」の困難として別の方向の身体運動の道を模索しているが、阿部らがいうように当事者たちにとってさまざまな困難、矛盾があ

るにもかかわらず「競技」は可能であるし、十分楽しめる（楽しまれている）のである。あるいはそれが「障害者スポーツ」の競技化にとっては、進展を阻害するひとつの困難かもしれないが、だからといって競技の実施が無意味になるほどの矛盾ではない、という状況がある〔阿部ら、2001：24-25〕。

そもそも障害者スポーツを実践する当事者にとって、競技における身体的条件の「平等性」という基準の幻想自体が、自明であり共有されているといえるのだ。対象者へのインタビューにおいて、筆者がチームの片足切断の選手をみてどう思うかを聞いたときの回答である。

ようこそ車椅子バスケットへっていう感覚はあるよね。彼らにはもっと可能性のある競技とかスポーツがある・・・でも、やっぱり、切断で車椅子バスケットやるってのはもちろん4点とか4.5とか持ち点は高くなるけど、スターになれるよね。だから、さっきもいったけど、僕らがもし手術が成功して健常者になったとしても、車椅子バスケットを健常の立場でやってみたいのと一緒に、一回スターになってみたいなあ、っていうのも正直あるよね。誰がみてもさあ、すごい動きをするわけじゃない？でも、当然、持ち点っていう状態のレベルがあって、その状態のレベルでははっきりいって勝負をしているわけで、もうマッチアップとかね。ぶっちゃけたはなし。3点は3点、2点は2点とかね、マッチアップしてる。そこで勝ちゃいいはなしなんだけど、はっきりいって初めて車椅子バスケットみたら華のあるプレイばかりみちゃうじゃない。インサイドプレイがすごいとか外のシュートがすごいとか、すごいとこみちゃう。だからスターになりてえな、っていうのは正直ある。〔Aさん〕

彼らは自分たち脊損の選手よりも、切断の選手など持ち点が高いほうが「誰がみてもすごい動きをする」「スターになれる」といい、身体的

差異がプレイに表れていることを認識している。つまり、競技性を担保するはずだった平等性が完全に達成されているわけではないこと、そして各人の障害の違いによって身体的な能力にも、第三者からの評価にも差が存在していることをわかっている。しかし、Aさんは「持ち点っていう状態のレベルがあって、その状態のレベルでははっきりいって勝負をしているわけで・・・そこで勝ちゃいいはなし」と述べる。車椅子バスケットの戦術は基本的に、攻撃時、味方の持ち点の高い選手に持ち点の低い選手が相手になるように、チーム全員で動く。戦術の大部分が持ち点のミスマッチを作るように攻撃したり、ディフェンスしたりするように組み立てられる。持ち点で端的に示される身体的差異はすべての選手に了解され、さらに身体的差異をもとに戦術が組み立てられるのである。また、2004年7月29日に、チームのWEBサイトの掲示板において、メンバーの一人はこの身体的差異が顕在化している点を、選手それぞれの「役割」だと表現している。

プレイには障害による身体的差異が顕在化しており、競技での身体条件の平等性が必ずしも達成されているとはいえない。さらに、車椅子バスケットは5人の合計持ち点が14.0に納まればよい。そのため各人の障害の程度や内容に関係なく同じコートで競い合うことになる。つまり、車椅子バスケットのクラス分け制度では、身体的差異が試合中に顕在化することがあらかじめルールによって定められ、この競技に参加することは、つねにすでに身体的差異によるパフォーマンスの違いが前提となっているといえよう。

このように車椅子バスケットは、制度的にもすでに身体的差異を内包したスポーツであり、むしろ、同じチーム内でも身体的差異があることによって試合中の戦術が組まれる点に、このスポーツの醍醐味の一部があるといってもよい。少なくとも、身体条件の平等性が完全に確保されていないことは、競技をする上で無視できない困難というよりも、ゲーム性を高める要因のひとつとして理解されている、ということができる。

3-3 「にせもの」の障害者

スポーツにおける平等性が幻想であることを認識しながらスポーツを実践している彼らにとって、「障害者」である自分、その「障害 (impairment)」、他の「障害者」はどう捉えられているだろうか。

障害者になっちゃってやだな、っていう気持ちはほとんどなくなってきたね。たまにラッキーって思う。俺らの障害程度って1種1級で最高級なのね。でも俺らより状態の悪い人っていっぱいいるじゃん。知的な障害もっている人も含めてね。そう考えてみれば、上みちゃうと切りないけど、下みたら俺らラッキーなんじゃない。[Aさん]

自分が障害者だとは、あんまり認識はしないよね。俺にしろOさんにしろ、年齢は違うにしろ、ある程度歳になって途中で障害者になってるじゃない……だから自分が障害者だっていう風にはあんまり思わない。社会的弱者っぽくみられてるから、弱者を装う。24時間テレビみててね。こう色々障害者の人ががんばってるじゃない。がんばれって思うようなね。おんなじ気持ちではみてないけどね。[Tさん]

他の障害者を「障害者の人」と他者的に呼び、彼らとは「おんなじ気持ちではない」と表明する。あるいは、「中途障害者」である自分を他の障害者と比べたら「ラッキー」ともいう。健常者社会の「常識」的視点から社会的弱者と自分たちはみられているから、弱者を装う。この点が彼らをして「障害者」と意識させるものである。だがこう意識しながらも、他の障害者を比較対象とすることで、彼らは自らを障害者ではなく、「健常者」の側に同定しているようにみえる部分もある。その点を端的に示しているようにみえるのが「ほんもの」の障害者と「にせもの」の障害者という語りである。

だってね……バスケット……ほんもののにせもの……ほんものっていうのは、街中とかで「うわあ、おかあしちゃん」(知的障害者を指している)とかいってる人。それがほんもので、俺らにせもの。何でもできるからね、っていう……健常者からしてみれば同じかもしれないけど。[Aさん (括弧内筆者)]

勝手に俺らのなかで線引いてるんだよね。逆に障害者が障害者を差別してんのかもしれない。[Tさん]

なんでもできるという自分たちは障害者ではあるが、それは「にせもの」であって、「ほんもの」の障害者とは違うと語る。「なんでもできる」(日常生活にもあまり困らない、スポーツもできる)という指標で健常者側に同化していこうとしているようにみえる。

だがこれだけでは、彼らがあえて「にせもの」と自らを表明することの営みが説明できない。以上の語りを聞いてから、数日後「ほんもの」「にせもの」という点についてメールで質問したときの彼らの語りがある。

言葉が悪いけど「にせもの」というのは、日常生活において自立していることを示します。障害者と言っても障害の状態によってはさまざまだから、そのなかでの差別やら偏見は多少はあるのじゃないかな？でもその反面、障害をもったことによる大変さや、苦勞することはわかっているつもりだから……自立できない(外にも出ていけないような状態)障害者のためにも、スポーツを通じて、仕事を通じてやれる俺たちが世間にアピールすべきであり、しなければいけない義務があると俺自身は考えています。[Aさん, 2003年12月2日]

障害者にもいろいろな人がいて俺たちみたいな足に障害があって車椅子でしか行動できないやつ……頸損の人もこれもしろろ損傷した部位で違うけど、俺が見た人は

見た目は普通なんだけど握力がなくて缶コーヒを両手でしか持てない人もいるんだよ。そういう人はどう頑張っても今、スピリッツでやってるバスケットはできないよね……そんな俺らから見てもっと障害の重い人たちを「ほんもの」と言ったんだと思うよ。障害者スポーツは本来重い障害をもっている人でも受け入れていくべきなんだろうけど、特にバスケットは競技性が抜き出てきちゃってるね。[Oさん, 2003年12月20日]

これらの語りから、彼らはスポーツを実践するなかで、中途障害者である自分たちをある「位置」に安定させる営みを行っていると考えられる。彼らは自らをあえて「にせもの」の障害者と位置づけることで、あくまで「にせもの」でありながら、障害者側に留まり中途障害者という自らの立場を安定させている。Tさんの語る、テレビに登場する「障害者」を「がんばれ」と思いつつも、テレビの「障害者」と自分は違うと感じる、ある意味矛盾した態度はこの点から説明できるだろう。彼らにとって健常者が実体化する健常者／障害者カテゴリーは、固定化されたものではない。

彼らの語る「ほんもの／にせもの」とは、具体的にはどのような状態を捉えているのだろうか。Tさんが「社会的弱者っぽくみられてるから、弱者を装う」と述べている通り、彼らは健常者からいわゆる「障害者」と括られる人々がどのようにみられているか、その視線を意識している。そしてある面ではそれに従って自らの行為を作り上げてもある。健常者の障害者に対する期待と、自分たちの日々の生活との差異を考えると、彼らは健常者からみて期待通りの障害者ではない点から、自らを「にせもの」と呼んでいるのではないだろうか。また逆に自分たちからみても健常者から期待される障害者像に当てはまるであろう、他の障害者を「ほんもの」と呼んでいるのである。

しかし、なんでもできるという自負のある彼らにとって、自らは「障害者ではない」という認

識もある一方で、「障害者」と呼ばれる人たちとも苦労や大変さを共有できるはずだ、という立場に立つ。そんな彼らにとって、「健常者／障害者」というカテゴリーは周りの状況、相手、文脈によって選択的に選ばれるものなのである。

3 - 4 カテゴリーを「ずらす」

健常者／障害者の枠組みのなかで、選択的に立場を選び取る彼らにとって「障害者スポーツ」あるいは「車椅子バスケット」はどのように捉えられているのか。以下は、筆者が主として頸髄損傷者の行うバスケットボール（ツインバスケット⁷⁾）についてどう思っているかを聞いたときの語りである。

私：旅行のときかな、Kさんの話が・・・ツインのことで話があって。同じバスケットでもツインと違ってどういう感じでみてるんですか？

T.：あれは障害者スポーツ。

A.：あれを、すごい失礼ない方かもしれないけど、全く分からない第三者がね、研究者の人とか、大会とか観にきたときに、障害者スポーツって素晴らしいってあれをみただけで思われたくない、っていうのはプライドとしてある。

T.：いや、でも違うよ。

A.：違う？

T.：俺の認識としては、違う。あれは障害者スポーツ。うん。

A.：車椅子バスケは違う？

T.：違うと思う。車椅子バスケはスポーツだと思うよ。障害者つかなくても。だから健常者もやるんだと思う。健常者が頸損（ツイン）バスケ入ったらどうにもなんないでしょ。なんだろうね、いい方悪いけど、やっぱり線を引いちゃうんだよね。自分より下の人たちは障害者みたいな無意識があって…。だから、自分が、まあ、なんていうかな、自分がさあ、障害者っていう意識が薄いじゃない。自分よりレベルの下…下ってい

うか、うーん、バスケットをできないくらいの状態だと、障害者だなんて思うから、自分達はあれは障害者スポーツなんだよっていう見方になっちゃうのかもわかんない。偏見なんだけどね。

ツインバスケットボールは、健常者が参加するとゲーム自体が成り立たないと彼らは考えている。一方、車椅子バスケットボールは健常者も同じようにゲームに参加できるという点から、彼らはこれをスポーツだと捉えている。つまり、健常者が入ってもゲーム性が保たれる位に車椅子バスケットは競技性が高く、その意味で「スポーツ」なのである。ツインバスケットボールはそうではなく、「障害者」のみのゲームでないと成り立たないことから、彼らはこれを「障害者スポーツ」と呼ぶのである。

逆に一般的に「バスケットボール」と呼ばれるスポーツはどうだろうか。武蔵野市主催の小中学生を対象とした、車椅子バスケットボールに触れ合い、体験することを目的としたボランティア教室でのことだった。チームの監督であるT.T.さんは挨拶のとき「私たちが日ごろ活動しているバスケット、是非みていただくとともに・・・」と話し、ルールの説明のときには「簡単なルールを説明します。バスケ・・・車椅子バスケットは・・・」と話す(2003年12月20日のフィールドノートより)。また、私が練習に参加し始めたとき、チームのメンバーの「なんかスポーツやってたの?」という質問に対して「バスケットやってました」と答えると、「ああ、健常のバスケやってたんだ・・・」や「バスケット? ああ、立ったバスケね」と返してくる。彼らの会話では特別な文脈でなければ、単にバスケットといえは車椅子バスケットを指して会話が行われる。

彼らは自分達の実践する車椅子バスケットボールを「バスケットボール」と呼び、一般的なバスケットは「立ったバスケットボール」と呼ぶ。このような背景には「バスケットボール」と「車椅子バスケットボール」が同じ競技の違う種目として捉えられていることが考えられる。

健常者社会の分類によるスポーツは「バスケ

ットボール」であり、障害者スポーツとは「車椅子バスケットボールとツインバスケットボール」である。だが、彼らの経験に沿った分類によるスポーツは「バスケットボールと車椅子バスケットボール」であり、障害者スポーツとは「ツインバスケットボール」である。

つまり、彼らにとって車椅子バスケットボールとは単に、「障害者」が行うスポーツという消極的なものではない。それはある固有の領域をもつ、積極的な意味で、車椅子を使用する「バスケットボール」であったといえる。そして彼らの実践は、車椅子バスケットボールを独自の領域をもつ固有のスポーツとして捉えることで、健常者社会が与えた「車椅子バスケットボールは障害者のスポーツである」というカテゴリーを組み替え、「車椅子バスケットボールというスポーツ」としてカテゴリーを「ずらして」いくものであると捉えられる。

彼らは健常者／障害者のカテゴリーを選択的に使用したり、その内実を組み替えたりするなどの操作を行っているが、当のカテゴリー自体を無効にできているわけではない。その意味で彼らにとってもいまだカテゴリーは存在している。だが、二項の内部で配分される要素を変更し、意味づけを変化させているという意味で、カテゴリーを「ずらして」いるのだと考えることができる。

4 おわりに

本稿の対象者は、完全な平等性の確保が幻想であることを知りながら、あえてそこに留まってスポーツを実践し、健常者／障害者というカテゴリーのなかで、選択的に自ら「にせものの障害者」という位置を占める。車椅子バスケットボールを健常者社会の押し付ける「障害者スポーツ」ではなく「スポーツ」としてカテゴリーをずらし、「健常者／障害者」という恣意的なカテゴリーを行き来する。

彼らの実践において、「健常者／障害者」というカテゴリーの枠組みは、決して固定的で実体的なものでもない。また、構築主義的な障害者観

によって示される、健常者から名指され押し付けられたカテゴリーをそのまま彼らが用いているわけでもない。それは彼らのスポーツの実践のなかから、スポーツとともに生み出された「スポーツにおける障害者観」であるということが出来る。

もちろん、あくまでもこれまでの記述はスポーツの場において解釈しうるものであることに留意しておかねばならない。確かに本稿の対象者たちは自らを「にせもの」として把握しており、一方で他の障害者を「ほんもの」と認識している。だが、だからといって彼らの身体が「障害 (impairment)」を彼らに感じさせていない、ということでは決してない。日常生活において、車椅子を使用していることからくる困難や、差別的なまなざしにも出会っている。脊髄損傷者特有の不随意の反射動作などの、「障害 (impairment)」による身体のままならなさを日々経験している。それにもかかわらず、彼らのスポーツ実践や、スポーツをする身体が基点となり、「にせもの」という彼らにとっては安定的な位置を確保しているのだといえる。それが彼らの生のすべての領域にまで適用されているとは現時点で断言できるはずもない。スポーツを基点として獲得された自らへのまなざしが、どこまで射程をもつのか、あるいは、純粋にスポーツ場面にのみに適用されるものなのかについては今後の課題となるだろう。

本稿の議論で示唆した彼らの障害に対するまなざしは、3名に対する聞き取りから得られたデータが最も特徴的であったが、他のメンバーからも類似した見解が得られている。だが、メンバー各人の「障害 (impairment)」はさまざまである。そのため仮に同様の見解が得られていても、彼らの身体条件によって経験される世界は異なっている可能性は否定できない。これが3名の対象者から論を展開している本稿における議論の限界である。この点も今後の課題として残ってはいる。だが本稿は、車椅子バスケットボールに参加する人々が、スポーツの経験を通してどのような社会的意味の世界を捉えているのかについての解釈の可能性のひとつを示すこ

とに主眼を置いた。

彼らを選び取る「にせものの障害者」という立場や、「スポーツ」としての「車椅子バスケットボール」という認識の背後には、ツインバスケットボールを「障害者スポーツ」として措定すること、また、他の障害者を「ほんものの障害者」として実体化し、自らより相対的に低い位置に置くという認識上の操作が存在していることは強調しておかなければならない。つまり、自らにとっては、可變的で選択的なものであった空虚な健常者／障害者の差異が、ここにいたって、固定的で実体化された健常者／障害者の差異として浮上してくるのである。

彼らの「にせものの障害者」や「スポーツとしての車椅子バスケットボール」という語りや実践からは「障害者／健常者」という差異の虚構性を明らかにすることはできる。しかし、それは「ほんものの障害者」や「障害者スポーツであるツインバスケットボール」に端的に示される、彼らと比べて相対的「重度者」を「健常者／障害者」の図式のなかで下層に位置づける操作によって可能になっているといえる。この意味で彼らの実践は、自ら選択的にカテゴリーを「ずらし」、カテゴリーの自明性を崩している一方で、「重度者」を「障害者カテゴリー」として実体的に措定するという、極めて両義的な性格を有しているといえるだろう。そして、彼らが「ツインバスケット」を「障害者スポーツ」として排除していたことには非常に重要な課題が含まれている。それは「障害者」による「他の障害者」の排除の構図を捉え、彼らの両義的性格を生み出す機制を考えることである。この視点は今後必要となるはずである⁸⁾。

本稿は、理論的ゴールをあらかじめ設定し、それに向けて論を進めたものではない。従来の議論は、論理や問題設定に先行して「このような社会・スポーツのあり方があるべきだ」、「スポーツでノーマライゼーションを達成したい」という研究者の理想や規範が入り込んでしまっていたのではないだろうか。本稿は、そのこと自体を批判しているのではなく、蓄積されてきた議論の重要性も理解している。しかし、筆者はそのこと

によって「障害者スポーツ」を論じながらも、「健常者／障害者」という非対称的な権力関係のなかでスポーツを実践しているはずの「障害者」の姿や経験を結果的に等閑視してきたことを問題だと考えている。障害者不在の障害者スポーツ論は、実践当事者の経験からも乖離してきたとともに、不在であるがゆえに方法論的、認識論的に行き詰まりを呈しているのだ、ともいうこともできる。

スポーツの実践という場面に立ち返り、また各人の「障害」が多様であるからこそ個人的な「経験」の場面に立ち返る。そのような地平から「健常者／障害者」、「スポーツ／障害者スポーツ」という空虚な差異の構造が実体化される場面、不均衡な権力が働く場面を捉え返す作業を行い、それを多数組み込んだ上で新たな障害者スポーツ論を構築していくことが必要であろう。佐藤が主張する「障害からスポーツを考える、また、スポーツから障害を考えるという姿勢」がスポーツ社会学における障害者スポーツ研究の重要な視点であるならば、「障害者」と名指されて生きざるをえない彼らの生にとって、さまざまな生活の1断片に過ぎないスポーツ場面における経験が何をもたらしているのかを詳細にみていくことが求められている。スポーツの実践から得られた自分自身や他者へのまなざしから、自己の「障害」や、健常者社会における「健常者／障害者」カテゴリーに対して再検討を促すことが「スポーツから障害を考える」という姿勢の目指すべき地点であろう。

注

- 1) 本稿の立場は、障害学と呼ばれる領域の知見に基盤を置いている。しかし、障害学は単なる認識論ではなく、つねに障害者の運動とともにあることを志向するものである。そのため、ここで障害学の生み出した認識のみを取り上げることは思弁化の謗りを免れえないかもしれない。障害学の動向に関しては、石川・長瀬編 [1999]、倉本・長瀬編 [2000]、石川・倉本編 [2002] を参照。
- 2) リハビリへのスポーツの有用性を提起する議論と

して飛松 [1999]、芝田 [1986, 1989, 2003] を参照。また量的調査による現状分析や問題提起をする議論としては井出 [1994]、高橋ら [1998]、武隈 [2000]、藤田 [2003] を参照のこと。

- 3) 1980年採択の国際障害者分類 (ICIDH) では障害は「impairment」「disability」「handicap」の三つに区分された。また、2001年採択の国際障害者分類第2版 (ICIDH-2) では「body and structure」「activity」「participation」とされ、機能障害 (impairment) ≠ 能力障害 (disability) と位置づけられている。

障害学ではICIDHにおいて機能障害 (impairment) と能力障害 (disability) と区別されたものは一括してimpairmentとされ、handicapとされる社会的障壁・差別はdisabilityと示される。

日本語ではどの次元も「障害」と表記されることが多いが、ここでは特に、個人の機能・能力障害 (ICIDHのimpairmentおよびICIDH-2のbody and structure) を指す場合には「障害 (impairment)」と表記した。

- 4) ただ後藤の議論も、本稿と同様に調査対象によって議論の展開に制約が働いていることは考慮する必要がある。
- 5) チームにおける調査は2003年7月から現在まで継続中である。調査は筆者も車椅子バスケットを実際にプレイしながら行う、いわゆる参与観察の形式で行っている。また、聞き取りも構造化されていないインフォーマルなものが大半である。本稿の引用は2003年11月12日の練習終了後、対象者3名へ行った2時間ほどのインタビューからの抜粋である。インタビューは筆者が投げかけた問いに対して3名に自由に会話をしてもらい、それを録音した。このインタビュー以外からのデータの日時は適宜示す。引用に際しては録音データを起こしたものを原文のまま引用している。漢字等は適宜変更した。
- 6) 車椅子バスケットボールの「クラス分け制度」は「持ち点制」と呼ばれる。持ち点制は定められた基準によって選手個人に1.0から4.5まで0.5刻みで持ち点が与えられ、試合中コートに出場している5人の持ち点の合計が14.0を越えてはならない。このルールは障害が重い人も軽い人も、平等に試

合に出場する機会を提供することが目的とされ、障害の軽い選手だけでチームを組むことを禁じ、障害の重い選手の出場機会を奪ってしまう可能性を排除するための措置であるといわれる。また、「クラス分けは車椅子駆動、ドリブル、パス、ボールコントロール、シュート、リバウンドなどの動作はもとより、車椅子座位における体幹のバランス能力とボールコントロール範囲に応じて分類されます。このように車椅子バスケットボールでは、それぞれのチーム間の公平性も保って」いると述べられている。

<http://homepage2.nifty.com/jwbf> 参照。

- 7) ツインバスケットボールは、主として頸髄損傷者によって行われる。通常のゴールのほかにフリースローレーンの中央にもうひとつ、低い位置に立てられたゴールが置かれ、ゴールが二つあることから「ツインバスケットボール」と呼ばれる。クラス分けも存在し、比較的「重度者」にも参加できる競技スポーツともいわれる。ルールや内容に関しては <http://www5.ocn.ne.jp/~twin/second.htm> (2005/01/10 確認) のWEBサイトに詳しい。
- 8) 彼らの「中途障害者」という立場による健常者社会の「常識」が入り込んでいると考えることは可能であろう。だが、筆者としては要因をこの点だけに単純化するのは得策ではないと考える。むしろ、それを前提としながら、スポーツをするという行為の遂行とともに考える視点、つまり、彼らの競技における「パフォーマンス」の視点から眺めることでみえてくるものがあると考えている。

文献

- 阿部智恵子・樫田美雄・岡田光弘, 2001, 「資源としての障害パースペクティブの可能性—障害者スポーツ(水泳)選手へのインタビュー調査から」, 『年報筑波社会学』13, 17-51.
- 海老原修, 2001, 「ある身体ともし身体—パラリンピック考:義足のモーリス・グリーン」, 『体育の科学』51(1), 67-71.
- 後藤貴浩, 2002, 「障害者スポーツのカテゴリー化に関する研究—車椅子バスケットボールチームにおけ

る実践を通して」, 『群馬大学教育学部紀要—芸術・技術・体育・生活科学編』37, 175-194.

- 井出精一郎, 1994, 「身体障害者スポーツの現状と課題」, 『都市問題研究』46(10), 53-66.
- 藤田紀昭, 1999, 「スポーツと福祉社会—障害者スポーツをめぐる」, 井上俊・亀山佳明編『スポーツ文化を学ぶ人のために』, 世界思想社, 283-298.
- 藤田紀昭, 2003, 「身体障害者施設における運動・スポーツの実施状況に関する調査研究—障害者に対する運動・スポーツプログラム普及のための基礎的資料」, 『障害者スポーツ科学』1(1), 64-72.
- 藤田紀昭, 2004, 「オルタナティブな存在としての障害者スポーツ」, 飯田貴子・井谷恵子編著『スポーツ・ジェンダー学への招待』, 明石書店, 281-289.
- 倉本智明・長瀬修編著, 2000, 『障害学を語る』, エンパワメント研究所.
- 倉本智明, 2000, 「障害学と文化の視点」, 倉本智明・長瀬修編著『障害学を語る』, エンパワメント研究所, 90-119.
- 長瀬修, 1999, 「障害学に向けて」, 石川准・長瀬修編著『障害学への招待—社会、文化、ディスアビリティ』, 明石書店, 11-39.
- 石川准・倉本智明編著, 2002, 『障害学の主張』, 明石書店.
- 石川准・長瀬修編著, 1999, 『障害学の主張—社会、文化、ディスアビリティ』, 明石書店.
- 石川准, 1996, 「アイデンティティの政治学」, 『岩波講座現代社会学第15巻差別と共生の社会学』, 岩波書店, 171-185.
- 佐藤充宏, 1999, 「障害者スポーツを共有する身体風景」, 『徳島大学総合科学部人間科学研究』7, 67-78.
- 芝田徳造, 1986, 『スポーツは生きる力—はばたけ! 障害者スポーツ』, 民衆社.
- 芝田徳造, 1989, 『障害者スポーツ—京都の挑戦』, かもがわ出版.
- 芝田徳造, 2003, 「障害者スポーツの過去・現在・未来」, 部落問題研究所『人権と部落問題』708, 22-31.
- 高橋豪仁, 1999, 『身体障害者スポーツに関する一考察—ソーシャル・ロール・パロリゼーションの視点から』, 『奈良教育大学紀要(人文・社会)』48(1), 37-48.

高橋豪仁・藤田紀昭・黒須充, 1998, 「第31回全国身体障害者スポーツ大会出場者のスポーツ活動に関する研究」, 『奈良教育大学紀要(人文・社会)』47(1), 89-104.

武隈晃, 「障害者スポーツとこれからのスポーツ振興の在り方」, 『スポーツと健康』32(1), 30-33.

飛松好子, 1999, 「障害者スポーツの医学的効果」, 『理学療法』16(10), 785-790.

山田富秋・好井裕明編, 1998, 『エスノメソドロジーの想像力』, セリカ書房.

八十川睦子, 2001, 『障害者スポーツ論の限界に関する

一考察』, 『奈良女子大学スポーツ科学研究』3, 31-40.

好井裕明, 1999, 『批判的エスノメソドロジーの語り——差別の日常を読み解く』, 新曜社.

参考 URL

・<http://homepage2.nifty.com/jwbf> 日本車椅子バスケットボール連盟 WEB サイト

・<http://www.paralympic.org> International Paralympic Committee WEB サイト

・<http://www5.ocn.ne.jp/~twin/second.htm>

The Sport Practice Shifts a "Disability Category"

From Narratives of Wheelchair Basketball Players

WATARI, Tadashi ¹⁾

Abstract

Some scholars have been argued about the disability sport as an alternative of modern sport. One of their remarkable achievements is that they bring the disability sport as a controversial issue for the field of sport sociology. However they have not argued about experience of sport practice of a "person with disability". In order to understand a disability sport, it would be necessary to consider specific sport experiences.

The purpose of this article is to illustrate how wheelchair basketball players recognize the "disability sport" and the "category of people with disability", and also to illustrate how they recognize a "self-impairment" and other "people with disability".

As a result, their sport practice creates an "outlook of disability in sport". In addition, they call themselves a "fake-disabled". To the contrary, they call other people with disability a "true-disabled". This outlook is not static "able-disable" category. In some way, it is new category created from their practice, and it could be called a categorization practice. While their sport practice dislocates a "category of disability", this practice also puts label on other people who are more "severely disabled" as a substantive category. Thus, their practice has an extremely ambiguity character. Finally, I suggest that disability sport studies in sport sociology should pay more attention to athletes' specific experiences. The experiences of sport practice influence on identity of players who cannot but live as a "person with disability".

Key words: Disability Sport, Narratives, Categorization practice

---

1) Doctoral Program in Health and Sport Science University of Tsukuba